〔書評〕

貴司山治研究会・編『貴司山治研究』

池田浩士

日本のプロレタリア文学を新たに再評価するという課題と向き合うためにも、大東亜戦争期の文学の全体像をこれから本格的に明らかにしていく作業にとっても、貴司山治は、避けて通ることのできない重要な表現者の一人である。その貴司山治が、敗戦後いまに至るまで、広く本格的に論じられることがなかったのには、もちろん理由があるだろう。

まず何よりも、戦後日本の「民主主義文学」総体が、大衆文学と呼ばれる領域に関してはついに一度も内実のある討論と考究を深めることがなかった、という歴史的事実を思い起こさざるをえない。一九二〇年代末から戦後まで一貫して文学の大衆性を追求しつづけた貴司山治は、現実変革との関係においてこの理念を公然と論じることができる時代がついにやってきたとき、その論議と実践の場を持たぬまま、忘れられた作家とならねばならなかったのである。戦後「民主主義」文学は、たとえば竹内好らの問題提起にもかかわらず、文学・芸術の大衆性というテーマをみずからの本質的な課題として引き受けることも、ましてやそれを実践的に作品化していくこともないまま、マルクスであれば「抑圧された民衆にとっての阿片」とでも呼ぶであろう大量生産商品が大衆文学の領域を跋扈するのを座視しつづけた。そして他方では、田村泰次郎、木々高太郎、松本清張、梶山季之らのすぐれた仕事を傍観するのみで、かれらから充分に学ぶことさえしなかった。もちろんこれは、かつてのプロレタリア文化運動における「芸術大衆化」という政治的方針が、「政治と文学」の関係に、少なくとも文学の側に、あまりにも無惨な痕跡を刻み込んだ結果にほかならなかったのである。文学の大衆性は、一九六〇年代前半に到来する日本共産党の最終的壊滅のときまで、表面的な言葉としてはともかく、内実的な課題として真剣に論じられ実践されることはなかった。日本共産党を除名された花田清輝らが、『故事新編』などの舞台作品によって新たな綜合芸術的大衆文学の試みを開始したとき、すでに貴司山治は――党員としてなお『間島パルチザンの歌　槇村浩詩集』（一九六四十月、新日本出版社）の編集刊行という作業を行なっていたとはいえ――過去の人だった。

このような経緯を考えるにつけても、貴司山治の仕事を近現代の文学の歴史的脈絡のなかにしっかり位置づけるための第一歩

が、『貴司山治研究』の一冊によって印されたことの意義は大きい。これは、いわゆる忘れられた作家の再評価、ということとは別の意味を持っている。あらためて言うまでもなく、文学・芸術表現にとっての「受け手」の重要性に着目することによって劃期的な前衛芸術表現（とりわけ抽象的表現）を切り開いたことこそは、二十世紀の表現文化の大きな特質のひとつだった。その受け手を「プロレタリア大衆」として想定したことは、無産階級こそが資本主義によって生み出された資本主義の墓堀人である、という認識にもとづくプロレタリア文学の基本理念だったのである。日本のプロレタリア文学が草創期においてすでに直面していたのは、講談や時代劇の系譜のうえに立ちそれらの受け手の厚い層によって支えられる「大衆文芸」（のちに「大衆文学」）という圧倒的な大敵だった。この大敵に正面から立ち向かうことができるような文学表現を実作によって提示しようとしたプロレタリア文学作家が、だれよりもまず貴司山治だった。林房雄、片岡鐵兵も同じような意図を抱いていたにせよ、かれらのモダニズム志向によっては描くことのできない労働者民衆への強いまなざしが、貴司山治にはあった。このまなざしが作者のどのような日常生活と感情と思考とによって裏打ちされ、どのような外的条件によって制約されていたのかを暗示するのが、本書にその一部が収録されている貴司山治の日記である。

本書は、もともと、DVD版『貴司山治全日記』の別冊として刊行された。本書に収載されている日記は、そのうちの一九三四年から三八年の分を浦西和彦が解読・翻刻したものである。この翻刻は、カタカナの「ン」を「ソ」のように書いたらしい貴司山治の字の特徴まで再現しており、印刷文字とはいえ読んで味わいのある資料になっている。収録分の時期だけでなく全日記の各時期について、計八篇の簡略な解題（「日記」から見る貴司山治の評伝）が掲載されており、比較的若い世代の研究者によるこれらの文章は、貴司山治にたいする良きオマージュであるとともに、これらの研究者がみずからに今後の「転向」を許さないという決意表明としても、読む者に襟を正させずにはいないだろう。これらの解題に先立ち、六人の論者による「解説」が収められて、日記公開の経緯や貴司山治を再評価するさいの論点などが示されている。なかでも、森久男「貴司山治の『蒙古日記』」と安岡健一「戦時・戦後の開拓政策と貴司山治」は、大日本帝国の海外進出の重要な一形態でありひとこまである植民地および内地の開拓というテーマに即してプロレタリア文学＝転向文学を読みかえるうえでも、示唆を与えてくれる。

これらの解説および解題に導かれて貴司山治の日記を読むとき、読者は、本書に収載された部分だけからでも多くの発見と今後の課題とに直面するにちがいない。わたしにとっての最大の発見は、貴司山治という表現者の人物評価の的確さと、内外の政治的・歴史的な出来事についての冷静な判断力だった。同じプロレタリア文学運動の内部の人物たち、とりわけ中野重治、蔵原惟人、宮本顕治、鹿地亘、山田清三郎らについての観察と評価は、

かれらのその後の身の処し方がまだわからず、しかも率直な評価が事実上許されなかった時点でのものであることを考えるなら、きわめて驚嘆に値する。スターリン体制による反対派の粛清や、ヒトラーという政治家のパフォーマンスについての批判も、感情的ではなく、冷徹さにおいてすぐれている。この日記の時期が終わったのちに貴司山治が心底から大日本帝国の侵略戦争を翼賛する心情に変わったことをどう評価するかという問題にとっても、一九三〇年代中葉から後半にかけての時期にかれがこのような明澄な視線で人間と世界を見つめていたという事実は重い。

だからこそますます、わたしたち後世は、貴司山治がこの時期に直面した二つの難問を、あらためて自己の課題として再認識しなければならないだろう。ひとつは、一九三四年六月十八日の日記に記された天皇制の問題である。書きつづけるために「転向」を決意したかれは、法廷で裁判官の追い撃ちによって、最後に、日本共産党の君主制廃止のスローガンに自分は反対であるという言質を取られる。転向の証しとしてかれが発表した手記と、それに沿った法廷での陳述では、「結局そのスローガンが間違ってゐるといふのではなく、このスローガンをかゝげてたゝかってきた日本の党の実践上の弱点を「批判」したことになってゐた」のだが、「頭の働きのいかにも鈍さうな裁判長」はそれを見逃さなかった。貴司山治は、党のスローガンに「反対か？」ときかれて「え。」といってうなづき、胸が迫って思わず涙を流したのだった。

だが、かれは天皇制を全否定していたわけではなかったのである。同じ日の日記には、「日本の君主制権力の明治以来の、肯定的部分と否定的部分の指摘」が自分の手記や上申書ではなされている、という記述がある。「歴史的にみればその肯定的部分が奈良朝時代にも存し、明治以後にも存し、そのことについての適当なる解明のないかぎり、そのスローガンを大衆に理解させることは不可能」である、とかれは考えていたのである。その認識の当否は措くとして、この認識こそが大東亜戦争期の貴司山治に『大扶桑國』（一九四二年十一月、全国書房）という東亜共栄圏小説を書かせたことは、忘れてはならないだろう。明治政府によってつくられた天皇制を古代天皇制と同一視させ、「否定的部分」を隠蔽するどころか空無化する「肯定的部分」こそは、近代天皇制の臣民統合機能そのものだった。日本の資本主義を支え、東亜の盟主を夢見る侵略戦争へと臣民を動員したのは、「肯定的部分」の天皇制だった。その臣民たちを「人民大衆」として想定するプロレタリア大衆小説作家、貴司山治は、かれの転向の時点ですでに大東亜戦争を容認し肯定していたのである。

これはしかし、貴司山治という一作家だけの責任ではない。日記が提起する課題のもうひとつは、プロレタリア大衆小説そのものの問題性と関わっているからだ。

労農ロシア（ソ連は当時こう呼ばれていた）やドイツで「プロレタリア大衆文学」というスローガンが提起されはじめたのは、一九二四年だった。当初それは、「労働者通信員」育成という具

体的課題の追求として実践された。工場や農村の労働者のなかから書き手を生み出していこうという運動である。日本を含む各国のプロレタリア文化運動が一定の地歩を築き、国際的な連携が進む一九二八年ごろになると、職業的な作家たちのプロレタリア文学運動への移行も顕著となり、とりわけ運動が強力になりつつあったドイツ、日本などで、あらためて「プロレタリア大衆小説」という課題が浮上する。貴司山治は、かれが国際的な関連を意識していたかどうかは別として、ちょうどこのような時期にプロレタリア文学に参入したのである。そして、のちに（一九六〇年代末の新左翼の擡頭を待って初めて）再発見されるプロレタリア文学の大きな問題点を、かれもまた共有することになったのである。それは、作品が描く人物像をめぐる問題に他ならない。

小説『ゴー・ストップ』に登場する鳥羽という人物に対して運動の内部から批判がなされたことは、よく知られている。これについて作者自身は、この小説が戦後の一九五五年一月に「日本プロレタリア長篇小説集（3）」（三一書房）として再刊されたとき、その「解説」のなかで、そういう人物はあの当時の運動のなかに実際に存在していた、と反論した。問題はしかし、鳥羽ではないのだ。ドイツのプロレタリア文学についての歴史的批判を試みたミヒャエル・ローアヴァッサーは、『清純な娘、強い同志――プロレタリア大衆文学とは？』（一九七五年一月刊）で、プロレタリア大衆小説がきわめてステロタイプな一種の理想的人物しか描かなかったことを批判した。この批判は、基本的に、『ゴー・ストップ』や『敵の娘』を始めとする貴司山治のプロレタリア大衆小説の理想的人物たちにも当てはまるだろう。そしてそれは、貴司山治だけの問題ではなかった。日本のプロレタリア文学だけの問題でもなかった。プロレタリア文学が、既存の大衆文学に対抗するだけのヒーローを生み出せなかったことが重要ではないのだ。プロレタリア型のヒーローを描き、かれらに心酔する大衆をそのヒーローと向き合わせることしかできなかった作家たちは、歴史的人物なるものをヒロイックに描く既存の大衆文学（現在ではＮＨＫ大河ドラマ）の轍を踏むことしかできなかった。そしてこのことは、日記が提起するもっとも本質的な問題――貴司山治が的確に見抜いていたような、文学はあくまでも文学として変革の一翼を担うべきであって、文学表現者が政治家を目指したり、政治家が文学を指導したりすることがあってはならない、という基本原理を、プロレタリア文学運動がついに実現しえなかったという問題――とも密接に関わっている。

貴司山治の日記は、いまだに未解明の諸問題、それどころか問題としてさえも意識されてこなかった諸問題を、いまこそ意識化するための、貴重な手がかりである。この手がかりを生かすことが、わたしたち後世に課せられている。

（不二出版、二〇一一年一月二〇日、四七八頁、定価七、〇〇〇円＋税）

（いけだ・ひろし　京都大学名誉教授）